

白銀 暁

しろがね・さとし 理学療法士 25 年目

国立障害者リハビリテーションセンター研究所福祉機器開発部福祉機器臨床評価研究室

北海道の病院勤務からスタートして機械工学を学び、リハビリテーション工学の研究と臨床を経て、理学療法士養成校教員を務めた後に現職。最近では支援機器の臨床評価、および車椅子・シーティング関連の研究に従事しつつ、同センター病院のシーティング・クリニックにも関与。振り返れば、これらの本と出会わせてくれた諸先輩の影響が大きく、あらためて、心から感謝いたします。

後輩に薦める 2 冊



脳のなかの幽霊

V・S・ラマチャンドラン、サンドラ・ブレイクスリー 著、山下篤子 訳
角川書店、2011 年

幻肢のエピソードが有名な本書ですが、個人的には、眼の「(マリオット) 盲点」の体験が印象に残っています。穴が開いているはずの視覚情報が、その周辺に依存してさまざまに補完されるさまは、無意識に行われる脳の複雑な所作の存在を強く実感させてくれました。その他、さまざまな症例を交えて脳の仕組みを推察していく内容は大変に興味深く、目の症例のつぶさな観察とそこに抱く疑問がとても大切であることを、あらためて思い知らされました。



脳の仕組み

川人光男 著
読売新聞社、1992 年

臨床で何気なく口にする「ここに手を伸ばして」といった指示が、いかに難題であったかに気付かせてくれた 1 冊です。人間のように言外の意を汲み取らないロボットを介在させる考え方によって、身体運動とその制御に関する理解が深まりました。また、自身の中にそれまであった、全か無かの法則で動くニューロンとその集合である脳が、身体運動をどのように制御し学習するかまでの大きな飛躍を埋めるピースのようなものを、本書に与えてもらったように感じています。

自分の 1 冊



脳と身体の動的デザイン

— 運動・知覚の非線形力学と発達

多賀厳太郎 著
金子書房、2002 年

身体運動とその制御、特に歩行について、医学とは異なる視点から解説してくれる、それゆえにとっても難解な 1 冊です。個人的には、本書によって、身体の力学的な機構そのものが歩行運動を形成し得るということに初めて気付かされ、それまでの神経系主体の考え方が大きく変わるきっかけになりました。合わせて、この領域での研究の歴史と奥深さに強く感銘を受け、もしかすると、その結果として、今、そこを避けて支援機器の研究に取り組んでいるのかもしれない。